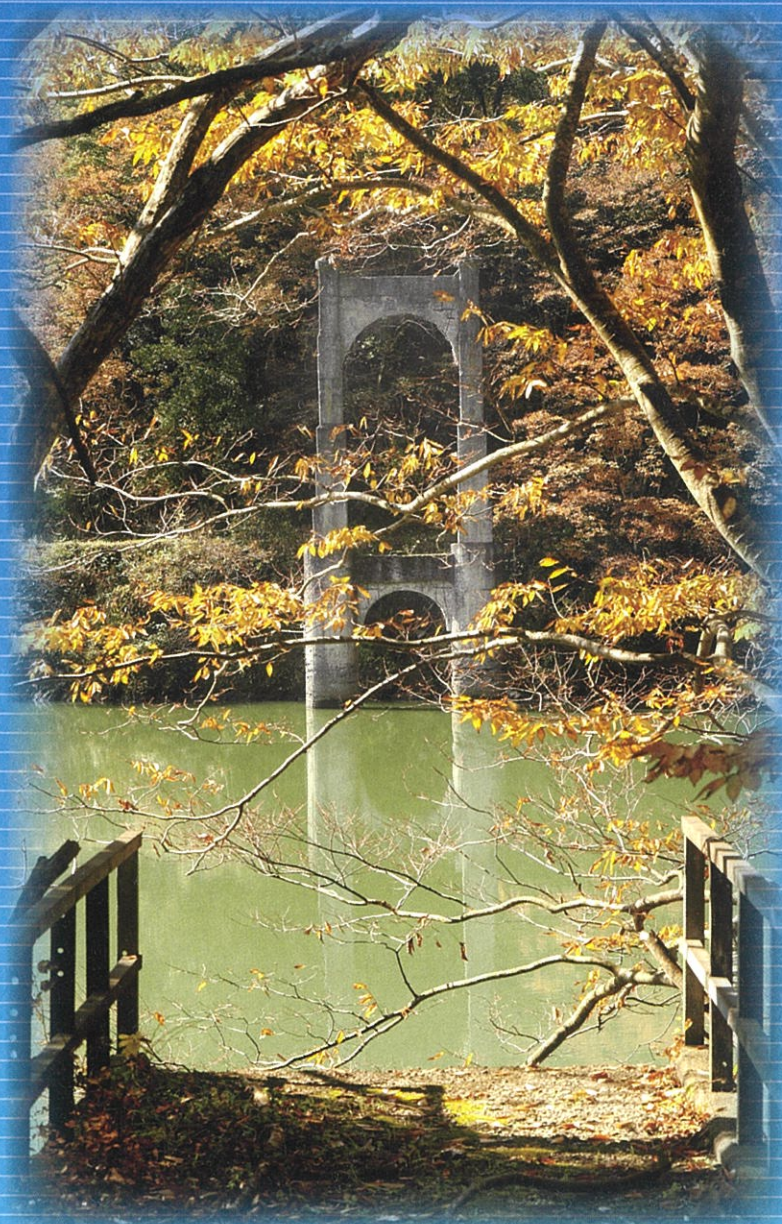


現場から学ぶ新潟水俣病

～教訓を語り継ぐ～



昭和橋（阿賀町）の橋脚の対岸に残る当時の欄干
(新潟日報社提供)

にいがたみなまた
新潟水俣病学習資料現地学習編



Index

- p1 『阿賀野川』『阿賀野川流域の人々の暮らし』
- p2 『松浜』『津島屋・一日市』
- p3 『安田町（現阿賀野市）千唐仁』『阿賀のお地藏さん』
- p4 『昭和橋』
- p5 『鹿瀬』『昭和電工(株)鹿瀬工場』
- p6 『鹿瀬発電所（鹿瀬ダム）』
- p7 『昭和電工(株)鹿瀬工場排水口』
- p8 『年表（抜粋）』

趣旨

本書は、新潟水俣病の学習をするにあたり、実際に現地を見る際の参考としていただくことを目的に制作しました。

新潟水俣病は、いまだ完全な解決には至っていないといわれています。

多くの皆さんから新潟水俣病を正しく理解していただき、語り継ぐことができることを願っています。

平成30年3月 新潟県・新潟市

【新潟水俣病】

旧昭和電工株式会社鹿瀬工場から阿賀野川に排出されたメチル水銀が食物連鎖で川魚に取り込まれ、それを人々が多食したことで発生した公害病で、1965年（昭和40）年に被害が確認されました。

阿賀野川

阿賀野川は、源流を栃木・福島県境の荒海山（標高1580m）に発し、福島県内で、猪苗代湖から流れる日橋川や、福島・群馬・新潟県境の尾瀬・尾瀬沼を水源とする只見川などと合流し、新潟県に入って常浪川や早出川などと合流し、新潟平野を流れ新潟市で日本海に注いでいます。阿賀野川は、新潟県では「阿賀野川」、福島県では「阿賀川」と呼び、流域面積7,710km²、延長210kmに及ぶ豊富な水に恵まれた日本有数の大河です。

新潟水俣病はこの阿賀野川流域で発生しました。

阿賀野川流域の人々の暮らし

阿賀野川は、かつては物資を運ぶ川船が行きかう重要な交易路でした。また、豊かな水量は、日本有数の穀倉地帯である新潟平野の農業用水として重要な役割を果たしていました。流域に住む人々は半農半漁によって生計を立てている人が多く、季節ごとにさまざまな魚をとる川漁が盛んに行われていました。サケやマスは売りに出され、ニゴイ、ウグイなどの魚は、当時の沿岸住民の重要なタンパク源として毎日のように食卓に上がっていました。このように、阿賀野川は流域の人々の生活の一部でした。



阿賀野川データ

- ・川の長さ 210km（日本で10番目）
- ・流域面積 7,710km²（日本で8番目）
- ・年間流出量 129億m³（日本で2番目）
（平成5年～14年平均）

阿賀野川流域の自然環境

阿賀野川下流部の川辺には、礫河原、蛇行区間や湿地、広いヨシ原や水面、砂州などがあり、ウケクチウグイなど河川の流れに応じた様々な生物が生息しています。河口部には、砂州が形成され、特徴的なハマエンドウやハマヒルガオなどの海浜植物が広く分布しています。



まつはま (あがの) 松浜 (阿賀野川河口 / 新潟市北区)

昭和期に沿岸漁業で栄えた町。昭和20～30年代は豊漁が続き自転車で行商に出かける女性たちもいました。新潟水俣病の事件では海の魚にも風評被害が及び、水俣病を隠すなど話題にしづらい、声を上げにくい雰囲気生まれ、地域ぐるみで「水俣かくし」がありました。

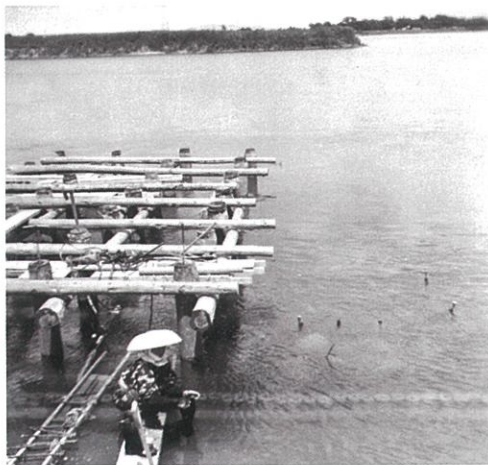


松浜のイワシ豊漁の様子
(松浜印刷所・寺山晃太氏所蔵)

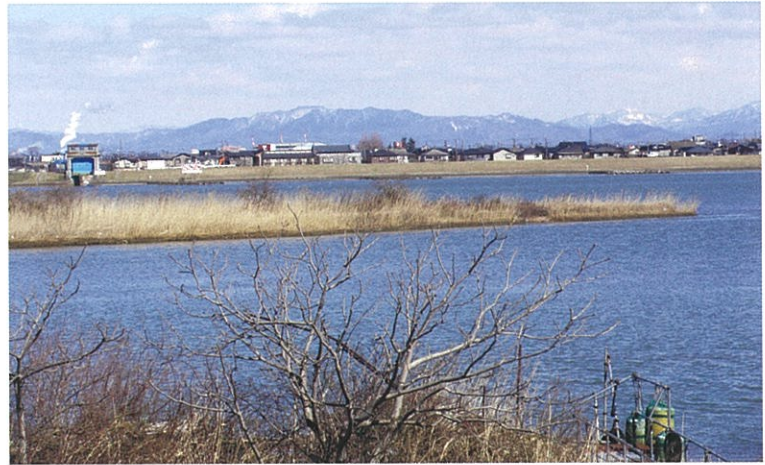


左岸側から見た阿賀野川 (松浜地区)

つしまや ひといち (あがの) 津島屋・一日市 (阿賀野川下流域 / 新潟市北区)



昭和30年代阿賀野川左岸の風景
(小武節子氏所有)



津島屋地区から見た阿賀野川

阿賀野川左岸の半農半漁の地域。漁業権を持つ家も多く鮭やヤツメウナギの他、ウグイ、ニゴイなどの川魚の漁も一年中盛んでした。最初の新潟水俣病認定患者が多く発生し、被害が最も大きかった地域でもあります。

発生当初、新潟水俣病の被害者の多くは阿賀野川下流域にみられました。

やすだ あがの せんとうじ 安田町（現阿賀野市）千唐仁

安田町（現阿賀野市）千唐仁は、阿賀野川に面し、（1960年当時）100戸ほどの小さな集落でした。集落のほとんどの家が川船を持っており、小型の「サンパ舟」と呼ばれる船や、帆をはった長舟などで阿賀野川の石などを運搬していました。また、この千唐仁は、地域ぐるみの水俣病未認定患者の運動が起こったところでした。このあたりは船頭という仕事に誇りを持った人が多い地域であったためと考えられます。

阿賀野川右岸の旧安田町側、ちょうど千唐仁付近の岸には「ワンド（湾処）」と呼ばれる池（川の湾）のようになっている場所がたくさんあります。流れがほとんどないため船の係留にも適しているところです。安田町で新潟水俣病の被害者が多い要因の一つとして、川船の船頭が多く、川魚を頻繁にとって、食べていたことが考えられます。



ワンド（湾処）に係留された川船（サンパ舟）
（坂東克彦弁護士所蔵）

あがの じぞう みなまた じぞう 阿賀のお地蔵さん「水俣地蔵」

千唐仁の阿賀野川の堤防のすぐわきに、2体のお地蔵さんが並んで立っています。写真左側のお地蔵さんは、1998（平成10）年に熊本県水俣市の水俣川の石で彫られた「水俣地蔵」です。このお地蔵さんには「不知火から阿賀へ」と刻まれています。

また、水俣市には1994（平成6）年に新潟から贈られた阿賀野川の石で彫った「水俣地蔵」があり、チッソ水俣工場百間排水口の近くに建立されています。

遠く離れていても、双方のお地蔵さんは互いに向きあうように建っています。

なお、写真右側のお地蔵さんは、ツツガムシ病で亡くなった人を思い、川での仕事の無事を祈り、平和な生活を願って建立された「虫地蔵」と呼ばれています。



水俣地蔵

（山口冬人氏撮影／（一社）あがのがわ環境学舎所有）

昭和橋

旧昭和電工(株)鹿瀬工場は、1929（昭和4）年、「昭和肥料」の工場として操業を開始し、地元で採れた石灰岩を使って石灰窒素を生産していました。

昭和橋は、その石灰岩を発掘する作業員が朝夕に渡る吊り橋として1934（昭和9年）に架けられ、掘り出された石灰岩は、ケーブルで工場に運ばれていました。

阿賀野川上流には今も橋脚が残っています。



旧昭和電工(株)鹿瀬工場のために建設された吊り橋「昭和橋」の名残（阿賀町大牧）

新潟水俣病が発生したころは、戦後の混乱、復興の時期を経て、我が国の産業構造が、繊維工業を中心としていた軽工業から重化学工業を主とする工業生産に傾斜していく時代でした。また、社会が豊かさや快適さを追い求めていました。この時代、四大公害病と言われる新潟水俣病、水俣病（熊本県）、イタイイタイ病（富山県）、四日市ぜんそく（三重県）をはじめ、全国各地で公害問題が発生しました。

公害被害者の深い苦しみと犠牲を教訓に、今日の我が国の産業構造が再構築され、産業理念と自然環境を守り伝えようとする意識が培われてきたのです。いわば、この時代に被害を受けた人々と社会の犠牲の上に、今日の私たちの生活が成り立っているとと言えます。